五穀豊穣・無病息災を祈る

所在地：西保木間 2-14-5　大乗院（だいじょういん）

都指定無形民俗文化財 公開

じんがんなわ

今から600～700年ほどむかし、大乗院（真言宗）にあった薬師堂に一匹の白蛇が住みつき、大門厨子（だいもんずし）（大乗院門前の人々の集まりで現在の町内会のようなもの）の人々は薬師如来の使いとしてこの白蛇を崇めるようになりました。しかし、戦乱により薬師堂が焼き討ちされてしまい、白蛇も死んでしまいます。すると、大門厨子の人々を疫病や飢饉（ききん）が襲いました。大門厨子の人々は、これを白蛇の祟りだと考え、白蛇を供養するため、稲藁（いなわら）を持ち寄って大蛇を作り、樹上に祀（まつ）るようになりました。この後、疫病や飢饉はおさまり、大門厨子は平安息災となりました。こうしてじんがんなわがはじまったと伝わっています。

もともとは薬師如来の縁日である1月8日に、大門厨子の人々が大乗院に集まって行っていましたが、近年は毎年成人の日に行われるようになりました。

藁で作った大蛇を開眼供養した後、災厄を追い払うため境内の銀杏の木に這（は）わせます。その後、一般見学者を含む参加者全員に干葉粥（ひばがゆ）（塩を入れず、干した大根の葉のみのお粥）と御神酒が振る舞われ、五穀豊穣・無病息災を祈念します。大蛇はそのまま木の上で、一年間、大門厨子を見守り続けます。

文化財豆知識　受け継がれる大蛇の魂

「じんがんなわ」は、「神願縄」や「蛇が縄」「蛇の願縄」が訛（なま）ったものと考えられていますが、はっきりしたことはわかっていません。起源は、南北朝の内乱（1336～92）頃とも、応仁の乱（1467～78）頃とも言われています。

一年間、大門厨子を見守り続けた大蛇は、燃やされますが、その灰を新しい大蛇の眼に入れます。こうすることで、古い大蛇の魂が新しい大蛇に受け継がれていくのです。

灰を眼に入れる